

UIFA JAPON NEWSLETTER



No. 122 Aug. 25, 2022

Union Internationale des Femmes Architectes Japon

国際女性建築家会議 日本支部

■主な内容

- UIFA JAPON 2022 年度第 30 回通常総会報告
- 第 29 回 UIFA JAPON 記念講演会
「カンボンと KIP—居住環境整備の手法—」を聞いて
- 記念講演会講師 著書紹介『スラバヤ』
- 特集：この指とまれ—愛知—
熱田神宮見学会
博物館 明治村によろこそ
明治村で新たな出会いを楽しむ
国宝「如庵」を旅して
- 会員のおすすめの本
『韓屋と伝統集落—韓国暮らしの原風景』
- 山田初江さんを偲ぶ



この指とまれ—愛知—第二日目 明治村で中川 武館長のお話の後、
旧帝國ホテル前で一緒に記念撮影 (写真：森田 美紀)

UIFA JAPON 2022 年度第 30 回通常総会報告 UIFA JAPON Annual Meeting Report 2022

森田 美紀
MORITA Miki



UIFA JAPON
森田 美紀 会長

2022 年 6 月 18 日 (土)
13:30 ~ 14:30、オンライン
にて、第 30 回 UIFA JAPON
通常総会報告が開催されまし
た。正会員 66 名のうち、書
面審議表決書提出が 28 名、
委任状 25 名の計 53 名で定
足数を確認し、総会開催が成
立しました。

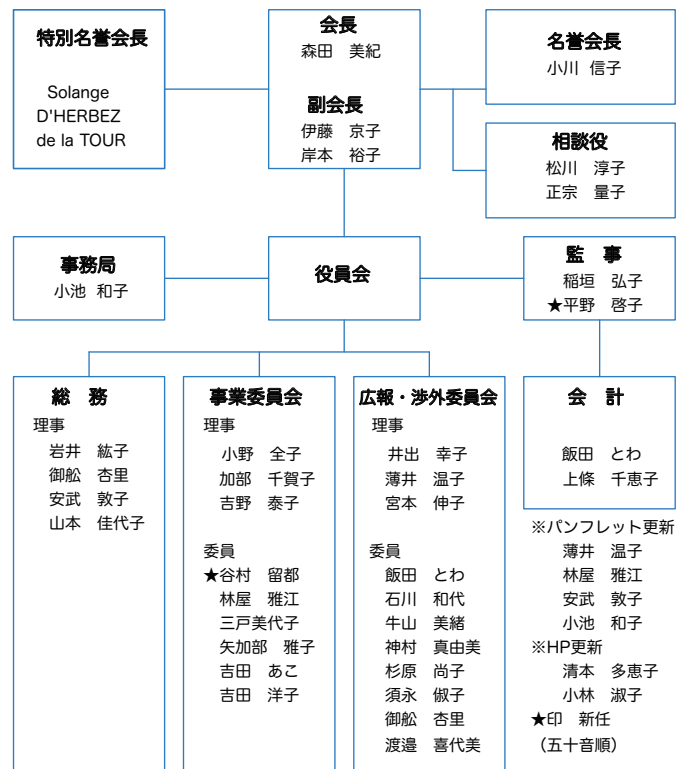
第 1 号議案 (2021 年度活動報告、会計報告、監査報告)
は賛成 53 名で承認されました。第 2 号議案 2022 年の
役員構成、第 3 号議案 2022 年度の活動計画、予算案
についても、賛成 53 名で承認されました。

今年度の総会も、コロナ禍のため、集会形式をやめて
昨年同様に書面による表決となり、総会当日は、会長、
両副会長、ほか 22 名の参加で Zoom によるオンライン
会議で報告。事前に、総会案内及び書面審議表決書・委
任状と議案書案を会員全員に郵送し、質疑を受付けて、
質疑回答後、書面表決 (委任状) は 6 月 13 日必着でメー
ル・FAX 又は郵送でお願いしました。

おかげさまで、滞りなく終了したことをご報告いたし
ます。ありがとうございました。

■各活動の継続について

2021 年度も新型コロナウイルスの影響で、新しい活
動様式を探りながら、工夫して継続してきました。6 回
の役員会は全てオンライン、各委員会のミーティングも
オンライン。だれフォト活動の写真展は完全オンライン
でパネルを作成し、宅急便等で展示パネルを各地に送り、
現地の会員が少人数で設営するという形を取り、15 カ
所で 16 回の巡回展を開催しました。



新型コロナウイルスが落ち着くまでは、直接集まるこ
とはなるべく避けて、リモートミーティングの良さも活
かしながら、状況を見て徐々に対面の活動を始められた
らと思います。

■海外交流について

台湾女性建築家協会 (WAT) メンバーとの交流も残
念ながら、新型コロナウイルスの影響で延期となってい
ます。工夫して交流は続けていき、進めて参ります。

「カンボンと KIP—居住環境整備の手法—」を聞いて 伊藤 京子

Kampung and KIP: Methods of Habitat Improvement ITO Kyoko



講師：布野修司氏
滋賀県立大学名誉教授

カンボン Kampung とはインドネシア語では「ムラ」を意味する。カンボンガンと言うと「イナカモン」である。都市の居住地なのに村という。この講演会チラシの布野先生の言葉になぜか惹かれ田舎者の私は 2022 年度総会記念講演会に参加しました。

布野先生は公共建築のひな型を作ってきた研究室出身で東洋大に移籍後、学長から東洋の事をやれとの一言で 1979 年からインドネシアへ通い始めて 40 年。先生は講演の初めにあまりにも多くの調査・研究・発表で全体像は話し切れないので今回は UIFA 会員の関心があることについて話すとのことでした。しかし、それでもお話は多義にわたり、この場で皆さんに全部を紹介することは難しくお話の中で私が関心を持った話を三つ紹介します。

一つ目はカンボンの町内会 / 隣組について。今まで日本の町内会の制度がいつできたのか知らず今回のお話で、1940 年隣組強化法によってつくられ戦時体制の維持に大きな役割を果たし、そして日本軍政がジャワに町内会制度を導入したこと。ジャワの「調和、和合」の伝統的概念と隣人による隣組組織が現在も続いているこ

と。強制的に組織化された町内会や隣組ではあるけれど日本も、インドネシアも相互扶助の精神は残していきたいと感じました。

二つ目は KIP (カンボン・インブルメント・プログラム) 住居改善計画は新規開発再開発を問わず直接的な住宅供給を行う政策ではなく、現地で住環境整備を行う「スラム」(不良住宅地) 改善事業であり、上下水道の設置、歩車道の整備、公衆トイレ・バスなど最小限のみを供給し住宅改善は居住者に委ねる手法で、カンボンでは、土を残し、水を浸透させそこへ植樹。樹木で涼しくなり、またコンポストを利用したごみ処理でたい肥を利用、塩分の多い水の浄化、リサイクル等々。Clean & Clean 政策を実施した当時のスラバヤ市長は日本で学んだ人とのこと。日本人として嬉しく思いました。

三つ目はルスン積層住宅。日本が提供した市営住宅が失敗だったのは日照権ではなく日陰権だったとの話を聞き、他の国の助成をするときはその国の事を知ることが大切であると知らされ、それにしても基本的なことも考えずにただ助成している日本の国が恥ずかしく思います。スラバヤ・エコ・ハウスは赤道直下、気化熱等が 2℃ 下がっただけで想定より温度が下がらなかった。3000 万円もかかり現地での普及は？日本で作ってみてどのように効果があるか興味がわきます。

カンボンの今昔、使われ方、問題点見習うべきこと等をもっと詳しく、また、その研究が現在の日本にどのように活かされているのか聞きたいと思いました。



小住宅の密集区域・カンボン



KIP の Clean & Clean 政策



ルスン積層住宅

(3 枚共写真：布野修司)

記念講演会講師 著書紹介

『スラバヤ』 東南アジア都市の起源・形成・変容・転成 コスモスとしてのカンボン

Surabaya The Origin, Formation, Transformation, and Metamorphosis of Southeast Asian Cities Kampung as Cosmos

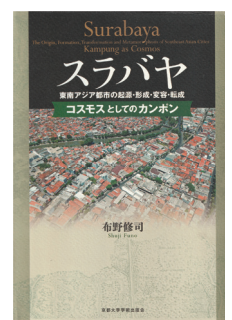
布野 修司 著

FUNO Shuji

この書籍の執筆者である布野修司氏は、2022 年度の UIFA JAPON 総会記念講演会の講師である。東京大学建築学科の計画系研究室の出身であるが、その後の経歴の中で東南アジアの住宅、集落、都市等を研究することになったと講演の中で伺った。その研究成果の集大成として出版されたのがこの「スラバヤ」である。だから、タイトルは一つの都市の名前でありながら、インドネシアのまち、都市を軸にアジアの都市の形成やつながりを紐解くことが出来る著作である。その中で「カンボン (都

市村落)」の成立から歴史の変遷、そして KIP (カンボン・インブルメント・プログラム) と呼ばれる新しいまちの形成への取組みまで、一味違うまちづくりの知恵が詰まっている書籍としてお勧めする。(宮本 伸子)

発行所：京都大学学術出版会
発行：2021 年 2 月 28 日
5,100 円 (税別)



この指とまれー愛知ー

Join Us to Visit Aichi

2022年4月10日(日)、コロナ禍に負けず各地から23名が愛知県名古屋市の熱田神宮に朝10時に集合した。今回の企画は役員会で久しぶりに関西と東京の間愛知で顔をあわせない? 明治村で集合? から始まった。ちょうど正宗会員から熱田神宮の諸施設を設計されている上田徹氏をご紹介いただいた。まずは熱田神宮参拝と

熱田神宮見学会

Atsuta Shrine Tour

杉原 尚子

SUGIHARA Naoko

近くに住みながら車で通過するばかりの熱田神宮での見学会、1998年から施設設計に携わる上田徹氏と熱田神宮祭務部部长で称宜の小久保雅広氏にご案内いただいた。

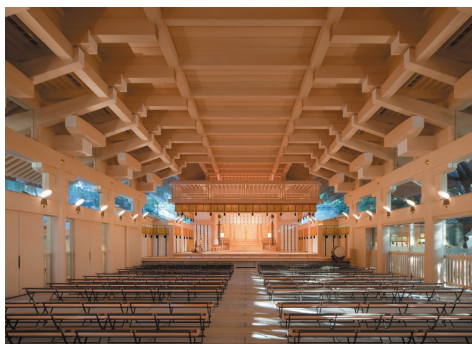
熱田神宮の歴史は今からおおよそ1900年前から。「三種の神器」の一つ、草薙御剣(くさなぎのみつるぎ)を祀り、伊勢神宮に次ぐ格式の大社。信長、秀吉、徳川の国家的な殊遇を受け、「宮の熱田さん」として全国の人々の崇敬を集めた。古代から長く尾張造の建築様式を特色とし発展してきた熱田神宮は、明治になってから伊勢と同じ神明造様式に本殿形式を改め、「大熱田」としての威容を誇った。しかしその建造物や諸施設は太平洋戦争で罹災しほとんど焼失してしまった。戦後、鉄筋コンクリートで再建されたがそれも老朽化、建替えが必要となり、また一つずつ新たな姿で生まれ変わってきている。

2001年設計の「祈禱殿」では、都市部にある一定規模以上の社寺建築に立ちほだかる法規制(防火上の)を解決するため、建物全体を3つの部分に分け、中央部分を耐火建築物とし、両側の二つを木造を主体とした建物とした。そうすることで、耐火性を持ちながら、木材料による神明造本来の形が生きる発展した伝統的建築の設計に成功している。また、通常大前結婚式か奉納行事の舞台として利用している長床の落縁部分は、回転させることにより年始などの臨時の神符授与台に変身するなど、細部に渡って細やかな工夫がなされている。上田氏は吉村順三事務所出身で家具も照明もすべて設計されているとお話に納得させられた。見学日、長床では結婚式が執り行われていた。

2009年設計の「神楽殿」は、周囲の神木は一切伐らずに残している。本殿の伝統木造と調和する純木造風の



神楽殿全景



神楽殿祭場

上田氏の案内で見学、その後、犬山市に移動し国宝如庵を見学し、明治村近くの入鹿の里 MUSICA に宿泊した。11日(月)は朝から博物館明治村へ。中川武館長のお話を伺った後、石川新太郎学芸員に解説をいただきながら帝国ホテル、聖ザビエル天主堂、宇治山田郵便局舎を見学後解散した。今回、なかなか会えなかった会員が、画面越しでなく直接会う機会もたまには必要と感じた2日間だった。(広報委員会)

外観ではあるが、構造主要フレーム部や深い軒の出においては鉄骨の力を借りて成立している。また、防火区画部分には耐火ガラス及び耐火スクリーンを使用し、全体を5ブロック、500㎡以下毎に分割し火災に備える。付随する授与所では、年始などの授与台増設の為、可動式カウンターを備えている(床の御影石に埋込まれた移動用レールあり)。当日は、森田 UIFA JAPON 会長が代表でご祈禱していただき、神楽奉納に参列した。

2012年設計の「みなも神殿」は、敷地内にある室町時代に勾玉型に作庭された人工湖に浮かぶ神島に、数百年ぶりに社を復元し、それに向かい遥拝できるように神殿を造ったもの。遺跡の湖底を守る為、神殿床は木造和船二艘の上に載せ水面に浮かべている。ガラス張りの開放的な空間で結婚式を挙げることができ、社のある神島を渡る橋は雅楽が登場する橋がかりとなるとのこと。面白い演出空間だった。周囲には昭和初期に移築された文化財建物群(又兵衛、龍影閣等)が点在し披露宴を行うことができる。貴重な建物が熱田神宮にあることを名古屋にいながら全く知らず訪れたこともなかった。

2021年設計の「草薙館」は、熱田神宮が草薙御剣を奉斎する所以から所蔵している450口を超える名刀を随時入替え展示・公開している。設計にあたっては屋外の樹木を鏡に写し込み、森の中の展示空間を目指したとのことだが、確かに展示室上部を見上げると、緑が写り込み神秘的な空間となっている。

歴史ある「大熱田」での上田氏の20年以上にわたる試みにより、熱田神宮は様々な年代の人が、参拝、七五三、散歩、結婚式など様々な目的で訪れ、にぎわっている。当初から上田氏と関わってこられた小久保雅広氏は、ご案内いただく途中、「さっとスケッチを書いてくださり、それがそのままその通りに出来上がる、いつも感動させられています。」と話された。私にとっては地元再発見となる貴重な見学会となった。長年、東京から通いながら熱田神宮の設計監理を続けられてこられた上田氏に敬意を表し、またゆっくり訪れたいと思う。

(写真：SS/Takenori Hikosaka)
(参考文献：『和の系譜に新たな視角』
著者：上田徹 / 玄綜合設計
2003年建築ジャーナル別冊)

博物館 明治村によろこ
Welcome to Museum Meiji-Mura

内藤 恵子
NAITO Keiko

「この博物館の出現は、皮肉にも昭和時代の人々が如何に多くの明治建築をすさまじく破壊したかを実証することになった」という谷口吉郎の言葉がある。確かに、そうでなければ明治村の誕生はなかっただろう。

明治村が建設されて早 60 年。明治村の理念には「単なる移築保存公開ではなく、その建物を通じて、人物・産業・文化など、当時に関連した分野を紹介し【明治の新しい形と心】を提供することが明治村の魅力と意義と考えている」とうたわれている。

見学会で説明をして下さった「修復・保存の達人」石川新太郎氏が明治村の文化財建造物維持の問題点を整理されている中で印象に残った 2 点について紹介したいと思う。一つは、木部の不朽劣化の修復の方法についての問題。木部の修復の際、木材の取替や樹脂補強を行うが、樹脂補強したものを次の修復時にどうするかという課題が残るといふ事。石等の無機物であっても呼吸しており劣化していく事。そしてもう一つは素材の問題。基本姿勢としては「既設の素材を踏襲し、調査の上、可能であれば創建時に使用されていた素材であるべき姿に戻したい」という考えの下に行っているそうだが、既に技法が途絶えているもの、昭和の初めに作製されたが、すぐ消えてしまったポット出の素材への対応が困難な事。又、塗料については現代までに改良が目覚ましく、嘗ての塗料を再現することは大変困難な事。これに対しては、成分分析や塗膜調査を行い記録することが重要というスタンスを取っていると。聞けば聞く程納得する事ばかりである。

「明治の時代を感じる」面白い場所がある。三重県尋常師範学校・蔵持小学校の玄関にあるアカンサスならず菜っ葉の柱頭飾りだ。当時外来の知識を一生懸命模倣した職人の心意気を微笑ましく感じ何だか嬉しくなる場所である。



見たこともない「アカンサス」を刻んだ職人の心意気？ー蔵持小学校

足を運ぶ大勢の人々に支えられてこそ維持できる明治村。今後も愛される場所であって欲しいというのが地元民となった私の思いである。



「猫の家」の玄関たたき：沓脱石の手前に大判絵タイルがあった



消えかかった青色にふと心を惹かれた埋め込まれた絵タイル

明治村で新たな出会いを楽しむ
Enjoy New Encounters at Meiji-Mura

井出 幸子
IDE Sachiko

見学会後と翌日、目星をつけておいた建物を巡る。

柴川又右衛門邸（武田五一設計 1912 年ー大正元年竣工）は阪神淡路大震災で被災し、解体後 12 年を経て 2007 年に西宮からここ入鹿池に向う崖池に移築・復元された。各所武田五一のディテールが見もの。エントランスホールとサロン間の開き戸は、グラスゴー派の影響が感じられるあの印象的な開口部デザインで、見学者用に並ぶ椅子もトーネットのアームチェアだ。



サロン開口部：曲線のある建具枠・枠のテーパー・割肌風型板ガラスなど五一とその時代が感じられる意匠

翌日、正門近くで出会ったボランティアガイド氏に道案内をいただく。

ブラジル移民住宅は 1975 年に移築された。日本人移民大工が尺貫法に基づき現地の堅木で作ったという。透けて丸瓦の背面がよく見える軒天井に、現地の風土とすまい方を垣間見た。

鉄道寮新橋工場で、ガイド氏から日本近代化におけるモノづくりの機械史の説明を聞いた。この工場の繊細でかつ大胆な鉄（骨）造（並列 2 棟の切妻屋根を支える鉄造キングポストトラス）の大きな空間が、機械史を展示する空間へと気持ちよくコンバージョンされていた。



ブラジル移民住宅の軒天井



鉄道寮新橋工場と産業遺産の織機展示

千駄木の漱石らの住まい「猫の家」へ、敬意を評して帰り際に再訪した。玄関の踏石前のたたきに大判の絵タイルが埋め込まれていた。後で瀬戸の会員は「本業タイル」かもしれないという。本業窯のサイトを検索したところ、明治以降の日本の建築を彩ってきた染付け絵柄タイルの窯のようだ。（左写真）

帰宅後 LIXIL 出版の『武田五一の建築標本』を再読。旅はいつでも尾を引いて、楽しみが続く。

国宝「如庵」を旅して
A Trip to the Japanese National
Treasure Teahouse Jo-an

上田 壽子

UEDA Hisako

本能寺の変と織田有楽

原稿の依頼のあった2022年6月2日は、440年前織田信長が本能寺の変で命を落とした日である。信長49歳、織田有楽（うらく）35歳であった。織田信秀の長男が信長、十一男（信長の13歳下の弟）が、名は長益、通称源五郎、織田有楽である。本能寺の変の前夜、信長は関白近衛前久ほか博多の豪商神屋宗湛などを招いて茶会を催したようで、この時に名物茶道具が失われた。

有楽に茶の手ほどきをしたのは織田家重臣の平手政秀とその一族であり、のち平手の末娘を妻に迎えて平手家に伝わっていた茶道具一式を受け継いだ。

有楽は本能寺の変の時、近くの妙覚寺に宿泊していて無事であり、安土へ戻って光秀軍の追手を交わして後、堺に移り茶友でもある今井宗久を頼った。天下よりも茶の湯を選んだ有楽であった。彼は本能寺の変の後、秀吉に従い出家して御伽衆となった。

その後、秀吉の天下になり、秀吉は信長の孫、三法師を後継者に仕立てて、その後見役に有楽を指名した。織田家の有力者は大勢いたが後継者争いに次々と消えて行く中で、政治には野心の薄い有楽を選んだのだ。

有楽の名の由来と如庵の席開き

有楽は最初「無楽」としたが、派手好きな秀吉に「有楽」を名乗れと言われ「織田有楽」となった。秀吉の没後、徳川家康の時代になっても天下の争いごとから有楽は身を引いていた。大阪冬の陣では有楽の姪に当たる淀殿との話し合いで大坂城に入っているが、夏の陣では入城していない。争いごとを好まなかった性格のようだ。

有楽70歳の時、元和4年（1618）京都建仁寺に「如庵」を建てて風雅な余生を送ることになる。席開きには公家・武士・僧侶・町衆などが参席したと言われる。茶を中国から持ち帰ったとされる栄西禪師が開いた建仁寺は、晩年を送るには一番ふさわしい地であったのかもしれない。その4年後、有楽は没した。

国宝三茶室の一つが「如庵」である。ジョアンという名の茶席であるが、これは有楽のキリシタンの受洗名であると言われる。

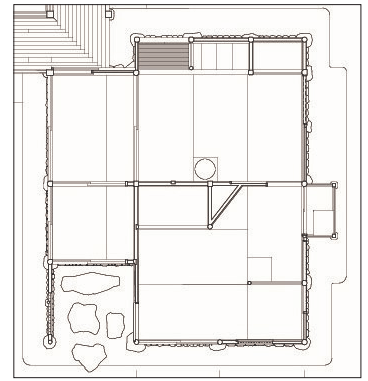
織田有楽という人物、利休七哲の一人と言われたり、「有楽」という銘の大井戸茶碗（東京国立博物館蔵）を残していたり、とてもおもしろそうだ。この時代の茶人はもっと深く探っていきたい。

如庵の変遷と見どころを訪ねて

如庵は、建仁寺塔頭正伝院～建仁寺塔頭永源院～東京三井総領家本邸～神奈川三井総領家別荘三井城山荘に移り、昭和47年名鉄犬山ホテル前の敷地（現在の日本庭園 有楽苑）に移された。

旧正伝院書院の南東に位置し、二畳半台目向切りの茶室で、注目すべきは床脇に鱗板をいれて斜めの壁を設けている事で、茶道口からの動線が工夫され、狭さを感じ

させない工夫。茶席の腰貼りは古曆を貼っており、曆張りの席ともいわれる。手前座横には洞庫が設けられ、手前座前、炉の前に中柱を立てはめ込んだ板を火灯形にくり抜いて手前座に明かりを入れている。手前座前の窓は単なる下地窓ではなく外側から竹が詰めて施工されており、これが「有楽窓」と呼ばれ、微妙な明かりが差し込む意匠である。3年にわたる調査・保存・修理を終え、この春、再公開された如庵に坐し、苑内スタッフから新たな発見があったことなどについてたっぷり伺った。



如庵平面図（提供：名古屋鉄道株式会社）
新発見：二畳半台目席畳下の板敷は鮑仕上げだったようだ。



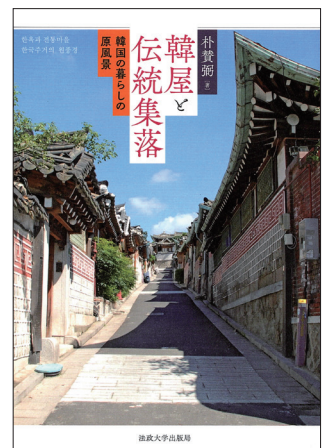
如庵外観写真（写真：井出幸子）
新情報：こけら葺屋根の葺替えとともに、調査が行われ、堀口捨己が考察復元した有楽苑開業当時の姿に修復された。

会員おすすめの本

『韓屋と伝統集落—韓国の暮らしの原風景』朴賛弼 著
Hanok and Traditional village
-Landscape and the folk life of Korea- PARK Chanpil

2010年UIFAソウル大会に向け、韓国語のご指導をいただいた法政大学の朴先生の著書の紹介をしたい。

1995年秋に開催された韓日シンポジウム（UIFA JAPON ニューズレター14号掲載）の折に、現地訪問した場所が多く紹介されていて懐かしく、その時手に入れた「河回仮面」は今も壁にかかっている。河回集落訪問の折に韓屋にも上げていただき暮らし方“男女の暮らし空間が区別されていて夫婦でも訪問する”など、もささやかながら空間体験もできた。表紙の写真にある町家群はソウル近郊だった記憶である。韓国建築家集団の案内であったから、かなり深く見ることができた。この本を携えて再訪してみたい感覚がUPした。（渡邊喜代美）



発行所：法政大学出版局
発行：2022年3月10日
4,000円（税別）

UIFA JAPON 事務局

〒102-0083

東京都千代田区麹町 2-5-4

第2 押田ビル (株)生活構造研究所内

Phone: 03-5275-7861 Fax: 03-5275-7866

E-mail: uifa@liql.co.jp

URL: http://uifa-japon.com

発行 2022年8月25日

THE SECRETARIAT OF UIFA JAPON

c/o LABORATORY FOR INNOVATORS
OF QUANTITY OF LIFE
DAINI-OSHIDA BLDG.
2-5-4, KOUJIMACHI, CHIYODA-KU
TOKYO, JAPAN 〒102-0083PHONE :+81-3-5275-7861
FAX :+81-3-5275-7866
URL :http://uifa-japon.com

惜別 Mourning



(社)日本建築士会連合会『建築士』
2005年8月号より
(写真:連合会事務局・故木村行道)

山田初江さんが2022年4月24日、92歳で風薫る空へ穏やかに旅立ちました、と訃報が届きました。心よりご冥福をお祈りいたします。生前お付き合いの長いお二人に思い出を語っていただきました。(広報委員会)

山田初江さんを偲ぶ

小川 信子

In Memory of YAMADA Hatsue

OGAWA Nobuko

山田初江さんは林雅子さんと同期生で、私が1947年に日本女子大学に入学した時から先輩でした。そして日本の女性建築家のパイオニアとしての地位を築かれました。

三人で建築事務所、林・山田・中原設計同人、通称ハヤナを創設、その初期に事務所運営会議に同席したことがありました。山田さんは建築士会、林さんは建築学会、中原さんはUIFAの前身PODOKOの担当となり、後輩の育成に力を注ぐことになりました。事務所運営と女性の社会進出を目指し、厳しい意見交換した頃ハヤナをまとめられたのが山田初江さんでした。

また、私達の仲間が軽井沢に『つまごい居』を計画した時、山田さんの案が採用され彼女の代表作にもなりました。私はドラフトマン役で働いたことが懐かしく思い出されます。私以外はそれぞれ建築家として豊かな経験をもっているのに、アイデアや図面が中々まとまらず、その時の山田さんの真摯な対応から、仕事人としての厳しさをひしひしと感じ取ることができました。

また、私がスウェーデン王立工科大学で学んでいた時に遠路はるばる訪ねて下さり、その暖かな心配りに緊張感がほぐれた覚えがあります。

初江さんの細やかな心遣いが、事務所を充実させ、発展させた原動力ではなかったかと思っております。お別れした淋しさが、更に募る此の頃なのです。

追悼 山田初江先生

大高 真紀子

Mourning Prof. YAMADA Hatsue

OTAKA Makiko

先生にお会いしたのは第4回UIFAイラン大会だった。イランに旅立つ際、羽田でご主人から「家内をよろしく」と言われた。まだ学生だった私に、である。

天真爛漫な先生は会議後の旅行中も、ひとつひとつに感動なさり、周囲への細やかな気配りも忘れない。ご主人に暖かく見守られながら、自由にのびのびと生きていらっしゃるような感じた。鎌倉のご自宅に伺ったのは2000年の年明けだったと思う。隅々まで心憎い気配りと仕掛けに満ちた、豊かで心地よい住空間に魅了された。

その後、先生が手掛けていらしたご著作の構想段階で微力ながらお手伝いをさせていただくことになる。「住空間の家族学」*である。先生に、ご主人から家内をよろしくと言われたのは、このことだったのかもかもしれませんねと話す、先生は静かに笑っていらした。先生には、折に触れてお心にかけていただいた。天を仰ぎ、御礼申し上げたい。心からご冥福をお祈りいたします。*「住空間の家族学」2003年、彰国社発行



1976年、イラン・ラムサールで開催されたUIFA第4回世界大会に日本からも大勢の女性たちが参加した。大会は当時のファラ・イラン王妃の開会宣言で始まり、盛大に開催された。これは大会合間のピクニックの写真。元氣いっばいの山田初江(中央)ほか、左手前より飯島静江、峯成子、船津貴子、山田規矩子、その後ろに立つ白井正子、顔半分のぞく真尾怜子、川嶋幸江、武田満す、平井美豊、中原暢子、などUIFA JAPONの初期を支えたメンバーたちの顔が見える。

(UIFA JAPON 相談役松川淳子記 文中敬称略 写真撮影:大高真紀子)

■役員会報告

2022年度第1回5月12日 オンライン会議 今年度総会及び記念講演会開催準備 この指とまれ愛知報告 この指とまれUR集合住宅歴史館報告 住まいづくりの勘所進捗報告 NL121号発送 122号企画報告

2022年度第2回7月5日 オンライン会議 今年度総会及び記念講演会報告 住まいづくりの勘所進捗報告 首都防災ウィーク参加準備 次回役員会は対面とオンラインでの開催準備 NL122号進捗報告

■編集後記

久しぶりに東京へ行った(杉原) / 未だ「囚われ感」につきまとわれ続けているが(井出) / また今年も、暑さの一番を競う時期となった(宮本) / WEBで会議は可能でも現場を見失うなど自戒もする(渡邊) / 人間と天変地異との闘いが続く(御船) / 山田先生に誘われ女性建築士の会に、その後UIFAにつながる縁を頂いた。先生の鎌倉の家から見た花火が懐かしい(薄井:編集長)